

近代イギリスの家族をめぐる

—最近の研究から—

梅津 順一

キーワード：家族、近代、イギリス

一、はじめに

総合文化研究所の「家族の諸相」というプロジェクトは、メンバーをかえつつ継続的なテーマとして続けていきたい、ということで発足したわけですが、そのためには自分の専門の近いところからそれぞれ家族をめぐる問題をもちよって、自由な雰囲気の中で討論し、家族の今日的な問題へのヒントをえたいという狙いがあるようにおもいます。そうした意味で、このフォーラムでは、家族をめぐる、半分は専門家として、しかし半分は素人として家族を論じることが許されるということになろうかと存じます。したがって、以下の話も近代イギリスの家族史の専門家として話すというのではなくて、私の専門領域の近くにある家族の問題を、なかば素人としてお話し、後の討論のきっかけにいただければと思っている次第です。

私は大学院は経済学研究科で、もともとは西洋経済史研究、とくに近代イギリスにおける資本主義経済の発生と宗教意識との関連ということからはじめました。政治史的にいいますとチューダー朝の絶対王政の成立、17世紀中ばの市民革命を経て、18世紀の後半には産業革命がはじまる時期で、自分の専門としてはさらに時期も対象も狭まるわけですが、歴史というのは雑学的な側面がありまして、対象がどうしても全体にかかわるといいますか、いくら問題を限定してもどうしても様々な問題が入ってくる、どんな問題でもはいつてござろうえない。経済史といいいましても、政治体制のかかわりとか、すでに申しました宗教意識との関連というように、さまざまな諸領域との相互関連と申しますか、境界領域というものが重要な問題になってきます。さらに、最近では経済史研究における家族の問題、家族に焦点をあつめて近代イギリス経済史を考えたらどうなるか、という問題が注目されるようになりました。

たとえば、イギリス経済史学会の最新の研究動向を伝えるものとして、*Studies in Economic and Social History*というシリーズが刊行されているのですが、その一冊として、エディンバラ大学の経済史の教授であるマイケル・アンダーソンによって、*Approaches to the History of the Western Family*という題名の本がでております。ここから経済史からみた最近の家族研究の動向をたどることができるのですが、この本の中で著者は、ヨーロッパの家族のありかたは、主に四つのアプローチといいますが、方法によって探究されてきたと述べております。

その第一は、歴史心理学といいますが、Psychohistory、第二は、歴史人口学、第三は心情といいますが、家族のセンチメント、情緒、情愛に注目するアプローチ、第四は、Household Economics、すなわち家族のありかたを経済的な主体として厳密に分析していこうというアプローチであります。このなかで著者は、第一の歴史心理学は、歴史研究としては異質なものであるとして除外して、それ以外の三つ学派の研究動向を紹介しているのでありますが、私の以下の話も、まずそのなかの歴史人口学的アプローチからみた近代イギリスの家族を取り上げてみたいと思います。

二、歴史人口学的アプローチ

歴史人口学という学問は、比較的新しい学問で、歴史における数量的データにもとづいて分析するという特徴をもっております。すなわち、ヨーロッパの人口史的なデータとしましては、教区教会に残された出生と死亡、結婚の記録があります。それはParish Register、教区簿冊とよばれますが、もちろんそうした古い史料はどこにでも残されているわけではありませんし、時系列的に完全にたどれるというものでもありません。しかし断片的であれこのこされた教区簿冊をとおして、人口の推計、家族の復元、社会構造のありかたの想定ができることになるわけです。イギリスにおけるこの研究グループは、ケンブリッジ大学の一群の学者によって取り組まれたことから、ケンブリッジ・グループと呼ばれておりますし、その指導的学者はピーター・ラスレットという方で、その代表的著作である『われら失いし世界』（三嶺書房、1986）は、日本にも翻訳紹介されていますからお読みになったかたもあるかもしれません。

このグループの研究によって、じつにさまざまな興味深いことが明らかとなりました。過去の社会について漠然と通念とされたきたことが、実は間違いであったということがいくつも知られるようになったのです。その第一は、イギリスではある時期までは、同居家内集団が大規模な大家族であり、近代とともに核家族に移行したということは間違いであるということです。はっきりとした史料で確認されるのは16世紀半ばですが、その時期のイギリスの平均的な世帯の人数は、4.75人ほどで、これは19世紀までほとんど変わっていないということなのです。このことは家族のありかたとしては、一組の夫婦とその子供によって構成される核家族が、ずっと一般的であったということを意味しています。また世帯の規模としては、その核家族にそれに家内奉公人が加わるということになります。近代の成立とともに、家父長制的大家族が解体し核家族が誕生したというようなことは、いえないということになります。

そのこととも関連して、結婚のありかたについてのイメージに修正が加えられました。過去のイギリスでは、結婚年齢、厳密に言えば初婚年齢ということになりますが、初婚年齢が想像されていたよりもずっと高いということです。ロミオとジュリエットは、十代のなかばのロマンスであったかと思いますが、シェクスピア時代のイギリスの平均的な初婚年齢は、男性は27ないし28才、女性は25ないし26才であって、そうした年齢の組み合わせも長期間安定していたということでもあります。しかも、世帯規模のデータから想像されるように、この結婚した新し

い夫婦は、両親とは独立して所帯をもつのが一般的でありました。それに、イギリスでは、結婚しない人、未婚率もたかく、19世紀以前ではほぼ10パーセントの人が生涯未婚であったことが知られております。これは何を意味するかといいますと、結婚は簡単にできることではなく、経済的独立を見通してはじめて可能となったもので、その条件が満たされない限りでは結婚はできなかったということなのです。

したがって、農民の息子であれば父の死亡ないし隠居をまたずして結婚できなかったし、その二・三男であれば、奉公人なりあるいは徒弟訓練をへて働きにでて、お金をためて、おなじようにお金をためた娘をみつけて結婚する。場合によっては、親からの分与財産を受けて、職人なり商工業者として経済的に自立できることになってはじめて結婚できたというわけです。この研究はまた、イギリス社会における社会的移動率の高さをも明らかにしました。17世紀のある教区では、十数年のあいだに、半分ほどのひとが入れ替わっているということです。イギリスの農民は、この時点で土地への愛着を持っていないのではないかと。核家族やこうした社会的流動性を近代のメルクマールと考える立場からするならば、イギリス農村はきわめて早熟であったといえることができます。事実、このグループの周辺から、アラン・マクファーレンの『イギリス個人主義の起源』（リプロポート、1990）のように、核家族、私的所有を基準とする個人主義を、13世紀にまで遡らせた研究もあらわれることになったわけです。

三、情緒論的アプローチ

このように歴史人口学的なアプローチが、近代イギリスの家族の長期にわたる連続性を強調したとすれば、情緒論的アプローチはそれとは対照的に断絶面を強調することになりました。このアプローチをとる歴史家たちは、16世紀から18世紀にかけたある時期に、近代家族の成立があったと考えます。以前の家族においては、妻および子供にたいする家父長の地位はたかく、家父長の威厳といいますか、権威が一般的であり、夫婦であれ親子であれ、感情的な結び付きが希薄であった。これに対して、愛情によって結ばれた夫婦関係、情愛によって結ばれた親子関係が生れてくることになる。このアプローチに属する研究として、フランスの有名なアリエスの『子供の誕生』（みすず書房、1980）という先駆的著作のほか、ショーターの『近代家族の形成』（昭和堂、1987）、ボロク『忘れられた子供たち』（勁草書房、1988）といった書物をあげることができます。また、こうした主張にもとづいて、この時期のイギリスについて大著をものしたのが、プリンストン大学のローレンス・ストーン教授でありまして、それは『家族・性・結婚の社会史』という題名で翻訳もされております。（勁草書房、1991 ただし、抄録版）

ストーンは、1500年から1800年にわたってイギリスの家族のありかたを研究したわけですが、1640年ころより、彼のキーワードであります、「情愛的個人主義」と特徴づけられる近代的な家族関係がうまれてきたと考えます。近代家族の核は夫婦関係でありまして、血縁的な関係あるいは地縁的な関係よりもつよい、情愛的な結合がみられるようになる。また、その家

族には個人の自律、個人の権利の感覚がともなっているというわけですが、それに加えて身体的なプライバシーへの願望が見られるようになるし、性的な快楽の追求に対して解放的な意識が見られるようになるとも考えられています。こうしたことから、配偶者の選択のしかたにおいて、それ以前とはことなっていえばロマンティックな要素が重視され、友愛的な結婚が好まれ、さらに親がこどもを慈しみ育てるといった態度もみられるようになったというわけです。

歴史人口学的な研究が、客観的な数量的なデータにもとづいて議論をたてたとすれば、この心情論的アプローチにおいては、文献的史料が重視されました。個人に関する記録、日記、自伝のたぐい、回想録、それにこの時期になると牧師による道徳的な家庭生活への指導書が出版されるようになりますし、それに俗人の指導書、また建築様式と住空間の利用のしかた、さらに家族の肖像画などが手掛かりとされました。ストーンがいうには、この時期からはじめて見られるようになるラブレター、あるいは夫婦および親子のあいだの親しみをこめた呼びかけ方といったものは、これ以前とはことなる近代家族の誕生を、疑問の余地なく明瞭に物語っていると考えられたのです。その意味で、こうした研究はこの時期に近代家族の成立、家族のあり方の過去との断絶を見出したといえることができるわけです。

ところで、こうした家族を構成するもの同士の、心情、情緒に注目した断絶説に対しては、歴史人口学にもとづく連続説的な立場からの批判がよせられることにもなりました。ストーンは主として文献にも恵まれている社会の上層を取り上げたのですが、ケンブリッジ・グループの一人ライトソンは、ストーンのいう情愛的な家族は、上層以下の家族のあいだでは、以前から一貫してみられたものだと言っています。では、逆にケンブリッジ・グループの立場からは、家族と社会の変化はなんら認められないのでしょうか。ライトソンの『イギリス社会史』（リプロボート、1991）は、あたかもその問にこたえるかのように、この時期の社会を持続的側面と断絶的側面という二つの側面から検討していますが、彼の立場からして、この時期を特徴づける社会現象として注目されたのは中産層の台頭でした。とすれば、中産層の家族のあり方を明らかにすることができれば、この二つの立場、歴史人口学的な連続説と情緒論的断絶説をなんらかのかたちで整合的に理解する道が開かれるということになります。（ついでに申しますと、ラスレットの場合には、当時のイギリス社会でいわば国事にかかわるといいますか、自己の狭い地域社会より広い視野をもっていたのは、ジェントリー以上の階層に限られていたという意味で、一階級社会であると考えていました。すなわち、社会はそうした支配階層と非支配階層の二分法で捉えられ、その面でも社会構造の持続性が強調され、この時期に市民革命をもとめる立場を批判していたのです。）

四、中産層と家族—その1、中産層とその文化

では、イギリス中産層の家族とはどのようなものであったのかということになりますが、そのまえにまず、近代イギリスを特徴づけるともいわれた中産層とはどのようなものかについて、簡単に触れておきたいとおもいます。当時、たとえば16世紀のなかばの時点で、社会階層

を示すことばとしては、ジェントルマン、市民、ヨーマンとその他というような四区分が一般的であったと考えられております。ジェントルマンというのは、その上層には公、侯、伯、子、男といった爵位をもつ貴族がいて、その下に準男爵、ナイト、エスクワイアーといった称号をもつか、あるいはまったくなんの称号ももたない唯のジェントルマン、ジェントリーというひとびとがおりました。彼らは一定以上の土地をもち、趣味のためには汗をながすとしても仕事のためには汗をながさず、伝統的に貴族に準ずる身分的地位をもっていた人々であったわけですから。

市民というのは、都市の商工業者の親方で市民としての特権をもつ人なわけで、都市でなんらかの独立的な営業にたずさわる人ですが、そこには彼らに雇用される徒弟とか雇職人とか、下層の職人はそこにはふくまれません。ヨーマンはしばしば独立自営農といわれますように、一定以上の土地保有をもち下院議員の選挙権をもっていた、農民の上層なわけで、いわばかれらは農村の市民として、村落の指導層を形成していたわけです。ともあれ、そうしたジェントルマン、市民、ヨーマンがいわば支配層、エリート層を構成したわけです。これに対して、さきほどのべた都市の職人、徒弟それに、農村のヨーマンの下層の階層であるハズバンドマン、さらにその下の、わずかの土地しかもたない小屋住み農とか、土地をもたないたんなる日雇い労働者、あるいは農村在住のまずしい職人などがいたわけですから。

ところが、こうした四区分、それは支配—非支配層という意味では二区分であります。そうした区分法とはべつに、しだいにコモン・ソートとか、ミドルリング・ソートとかいう言葉が登場します。このことは社会の中間にある程度の厚みをもって独特な社会階層が形成されてきたことに対応すると考えられております。農村の中産層としましては、ヨーマンのほかにハズバンドマンの上層、それにこの時期は農村地域に農村工業が展開していった時期であり、農業とたとえば織布業を兼営するというかたちで、農工兼業によって社会的地位を向上させていったひとびとが登場しました。さらに、そうした農村工業が凝集し、それ以前とはことなった系譜をもつ農村都市が発生しますと、都市の市民といっても、より幅ひろいひとびとを含んでいくことになります。

都市人口がふえ、営業の種類もひろがりますと、独立した一定の地位以上の商工業者の数も増えてくることになります。それにくわえて、専門職に従事するひと増えといったと考えられます。法律家、医者、聖職者といったひとびとが専門職を構成するわけですが、かれらは一一部はジェントルマンの一員であります。多数は中産層の一員でありました。たとえば彼らの上層、聖職者であれば高位聖職者はジェントルマンに準ずるわけですが、その下の階層たとえば教区牧師は中産層に近いということになるわけですから。

こうした中産層の台頭に対応して、独特な文化が成立することになりました。これはだいぶ古い研究ですが、歴史家というよりあるいは英文学者かも知れませんが、L. B. ライトの古典的な研究に、『エリザベス朝イングランドの中産階級文化』という分厚い本があります。そこで彼はまた、中産層の台頭とともにあらわれる独特な文化として、たとえば営業活動への評価、独立とか、進歩とか、あるいは実用性への評価があり、知的関心がたかまり、向上心も顕

著にみられるようになる、といっております。それは目にみえるかたちとしては、独特な出版文化が発生するようになり、多種多様な自己改善のためのハンドブック、宗教改革とも関連する性格指導書、実用的なものでは、旅行案内、営業案内、会計書、知的関心のひろがりに対応して、外国語の手引き、歴史や、地理、探検の著作、宗教への関心のたかまりに対応する文献があらわれる。また、18世紀になると中産層の読者層を前提として、新聞、雑誌の発行、さらに小説があらわれるようになる、というわけなのです。

五、中産層と家族—その2、経済的独立と結婚

ロンドン大学でながく教えた、ピーター・アールの『イギリス中産階級の形成—ロンドンにおける営業と社会および家庭生活、1660—1730』は、ロンドンの中産層にそくして、家族のあり方にも注目しております。アールの場合には、中産層を独立の営業主体、蓄積と向上をめざすひとびとと捉えておりまして、そうした中産層の生活はそれにふさわしい家庭生活を築くことになったと考えられているわけです。さきほど話題としたイギリスの結婚年齢からみてみますと、ロンドンの中産層の場合には一般的にいて、男の初婚年齢はあまりかわらないが、女の場合にはより若く、年齢差が平均よりは大きいことが知られます。それを階層別にみますと、資産の大きいものほど男の結婚年齢はたかく、女は若いというデータがでております。これは男の側で、とくに上層の貿易商人などの場合には、経営的な意味で準備期間がながく必要であったこと、彼らと結婚する裕福な家庭の娘の場合には、親が結婚資金を準備してあげることができたので、若く結婚できたから、と考えられております。

いずれにせよ、経済的独立をまって結婚し、独立の家計をもったという意味では、ロンドンの中産層も、イギリスの全体的傾向と同じといえるわけですが、都市において独立の営業を営むことができるためには、通常は徒弟という修業期間をもたなければなりません。十代のなかばに親方を選んで、徒弟訓練のためのお金を支払って七年ほど住み込みで修業させてもらうことになります。貿易商人とかロンドンの由緒ある組合の場合には、ジェントリーの次・三男が徒弟となる場合も少なくありませんでした。徒弟期間を終えたものは、つぎはジャーニーメン（雇職人）となって、もともとの意味からすれば渡り職人となって、今度は賃金をもらってはたらき、創業のための資金をためるということになります。必要な資金は職種によってかなりの相違があったようですが、調達方法としては、自己の資金の他に、親が一部を準備するか、親戚が貸与する、あるいは一種のチャリティーとして独立資金を提供する、場合によっては複数でパートナーシップをつくるというやり方があったようです。

そこで経済的に独立できれば結婚できるということになりますが、ここで注目されるのは結婚相手の持参金が経済的独立の資金としてアテにされたという事実があることです。当時のひとびとにおいて、理想的な結婚は、こんにちと同じように性格の一致とか、社会的地位の釣り合いとか、宗教的教派とかが考慮され、ストーンのいう愛情も重視されたことはたしかなのですが、アールはそれに加えてそうした経済的側面も少なからず考慮されたというわけなのです。結

婚をとりまとめる際に、結婚契約が結ばれる場合もありましたが、その際にはそこでは花嫁の持参金の金額が記されており、不幸にも寡婦となってしまった場合の寡婦の取り分も取り決められていました。親が子供の結婚に際して準備する金額には、男女の差はなかったとアールは考えていますが、花嫁が準備する持参金が多額におよんだ場合には、分割払いされる場合もありましたし、遺産として提供される旨約束される場合もあったようです。

ロンドンの当時の中産層の家屋は、三階建てで一階が仕事場ないし店舗、二階が台所と食堂、主寝室ともう一つの寝室、三階にさらに二寝室と屋根裏べやがありました。そこで夫婦と子供たち、それに徒弟や雇職人、家事使用人が住んでいて、こどもの数が少ない場合には、間借人を同居させていました。当時のイギリスの世帯についてすでに見たように、親と別の世帯をもつのが普通で、親族が同居しているのはごく例外的に見られるだけでした。

六、中産層と家族—その3、女性からの視点

最近の欧米の研究では、家族史に加えて女性史の研究がさかんなのですが、アールの取り上げたロンドンの中産層については、女性の視点からの研究がごく最近出版されました。マーガレット・ハントさんの『中産層—イングランドにおける経済、ジェンダー、家族、1680—1780』。じつは、ハントさんは、私が客員研究員として滞在したアマスト・カレッジの歴史および女性研究の教授です。私自身アメリカではこの問題を研究していたわけではないのですが、従来より中産層に関する関心はもっており、たまたま地元の新聞でこの本のことの紹介されていて、早速手にいれてみて、著者とも面会を願ったという事情があります。それはともかく、中産層の生活は女性の視点から見ればどうであったか、ということになりますが、すでにライトの著作でも、中産層文化として女性の読者の台頭があったこと、女性の生き方に関する議論も盛んであったことが触れられていたわけですが、ハントは伝記とか小説とか、裁判記録などを克明によんで当時の事情を綿密に描きだしました。

たとえば、ウィリアム・スタウトというクウェーカー商人の大部の自伝があつて、これは別の関連でもしばしば参照される文献なのですが、そのスタウト家には5人の息子と1人の娘がいました。その娘エレンの立場から見ると、まず他の兄弟たちは12才から14才ごろまでは学校にやらされていたのに、エレンの場合にはその期間は兄弟の世話をさせられていました。財産の分与においては、アールによれば男女の差別はなかったということですが、兄弟は100ポンドないし200ポンドなのに、エレンの場合には80ポンドであり、本来はこれが結婚持参金となるはずなのですが、エレンは健康がすぐれず結婚できないという理由で兄弟に貸与させられてしまいました。その後のエレンの生涯は、兄弟の家の家事の手伝いとか営業の手伝いとして過ごすこととなりました。つまり息子は、徒弟教育をうけるなど独立する技術をみにつける教育期間をもつが、娘は、家事手伝い、針子、養護、店舗の手伝いとして過ごし、父・母・兄弟のための補助を提供させられる場合が多かったということになります。

また結婚した場合には、女性は法的には独立の地位を失うことにもなりました。デフォーの

小説の主人公であるロクサーナの表現によれば、既婚女性は「自由、財産、権威とすべてを諦め、男性にあずけ、それ以後ずっと女性は実際単なる女性、つまりは奴隷であった」ということになる。というのは、独身女性の場合には、法的には独立の地位を認められていたのですが、結婚すると夫婦一体の原則によって、女性は所有権はみとめられず、訴訟も契約も彼女自身ではできなかったのです。

ただし既婚女性であっても、分離財産を設定することにより、あるいは営業独身女性という法的地位を獲得することにより、事実上独立する道ものこされていました。この場合分離財産の設定とは、結婚にあたって夫の同意にもとずいて、妻の財産として夫が自由にできない財産を別個に設定することです。たとえば、多額の遺産を既婚の娘に残す場合、夫の自由にされないように分離財産として遺贈することが可能であったわけです。あるいは、財産をもつ女性が再婚するといった場合、自分が営業を営んでいたり、投資していたりしていたものを、分離財産として扱う方法があったわけです。

ということは、中産層は男性文化のようにも見えますが、実は女性も営業の主体となることができたことを意味しております。独身女性も、あるいは既婚女性も自己の営業をもつことができたのです。ただし、女性の場合には、正式に徒弟となって修業期間を持つということはありませんでした。また、女性が従事できる職種についても、一般的な性別分業がここにも妥当していて、かなり限定されていたことも事実です。たとえば個人的なケアをする、養護、助産婦、家事使用人といった仕事、針仕事、裁縫をふくむ織物、衣料関連、小間物類の販売、それに食品の加工と販売といったものに限定されていたわけです。

ただし、このように女性が自己の営業をもっていた場合でも、その地位は不安定であったことをハントは明らかにしています。すなわち、既婚女性が法的に独立を得る道がのこされていたとはいえ、現実には男性と対等な立場にはなかったというわけです。たとえば、夫と妻がそれぞれ独立の店舗をもって営業していた場合、夫と妻の地位は対称的ではなかった。夫の営業がうまくいかなかったような場合、妻の営業は当然家計補助的なものとして理解された。あるいは、家庭内で夫はその権力が腕力かにものをいわせて、しばしば妻の資産を不当に侵食する場合があったことが知られています。さらには、夫の破産によって当然のこととして妻の財産が取り立てをうけることもあったというのです。

七、おわりに

以上、近代イギリスの家族をめぐる研究を駆け足でたどってまいりました。まず最初にその連続と断絶をめぐる、歴史人口学的研究と情緒論的研究を対照的にご紹介したわけですが、実はもうひとつ経済史研究との接点として家政論的研究というグループがあるのですが、これは経済史的背景と家族の動態を関連づける研究で、ご紹介するにはやや複雑な問題をはらみますので、本日は省略しました。ともあれ、近代イギリスにおいて中産層の台頭がみられたことは、最近の研究史において改めて注目されておりますが、その中産層に即した家族の諸相を、

いくつかの研究をてがかりに、そのおいしそうな部分の御試食を願ったわけです。ただし、その中産層と申しますのは、あくまでも社会学的な階層区分でどうも無味乾燥ともしますか、もうひとつ具体的なイメージがわきにくい面もあるかと思いますが、最後にもう少しその辺を補っておきたいと思います。

先にみました、アールのロンドン中産層の研究に、1660年から1730年という副題がついておりましたが、これはダニエル・デフォーの生涯にほぼ一致しております。アールにはもう一つ、『デフォーの世界』という著作がありまして、イギリス中産層の形成とはまさしくデフォーの時代と重ね合わされて理解されているわけです。事実デフォーは、ロンドンの肉屋兼獣脂ろうそく製造人の子供として生まれ、徒弟にはいかずにディセンティング・アカデミーという当時の非国教徒のための高等教育機関を卒業し、知的専門職への道もあったのですが、ロンドン近郊で実業家として出発し、名譽革命を機に政治に首を突っ込むことになり、有力政治家の顧問兼政治雑誌の編集者として長いあいだ健筆をふるいました。したがってその見聞はひろく、イギリスの旅行案内書を書きましたし、また経済学的見識をもち、デフォーの著作は古典経済学の叢書の一冊として翻訳もされておりますし、彼のことをアダム・スミス以前のもっともすぐれた経済学者であるという人さえおります。

彼の小説をはじめとするまとまった著作活動は、政界、言論界を引退したあとで書きはじめられたものですが、それらはすべて中産層文化の典型的表現として受け取ることができるわけです。『ロビンソン・クルーソー』が、彼自身の生涯のアレゴリーであり、いわばイギリス中産層のイデアルタイプであることは、しばしば指摘されております。しかもそれだけではなく、イギリスの商工業者のための指導書を書きましたし、また今日の主題である家庭論も書いております。ところで、こうしたデフォーの表現形式を、自伝、職業論、家庭論とならべてみますと、実はそれらが宗教的な表現形式を踏襲したもの、一面ではその世俗化したものと見ることができます。多くの人に読まれ影響をあたえた、ベストセラー『ロビンソン・クルーソー』は、ピューリタン文学のベスト・セラーである『天路歷程』、もう少し広くいえばピューリタン文学のスピリチュアル・オートバイオグラフィーと対応するものを含んでいるのです。そのことは他の著作にもいえ、中産層文化は一面でプロテスタント文化との親和的関連をもつことを示唆しております。最後に唐突にもうひとつ大きな問題を提起することになりましたが、今日の主題は、私はうかがうことができませんでしたが、家族の諸相の前のフォーラムの主題である、伊藤勝啓先生の「カルヴァンの家庭論」とも接点をもつことを最後に触れておきたいと思ったからです。

主要参考文献

- Anderson, M *Approaches to the History of the Western Family 1500-1914*, Mcmillan 1980
- Earle, P *The Making of the English Middle Class; Business, Society and Family Life in London 1660 - 1730* U. of Calif.P, 1989
- Hunt, M *The Middling Sort; Commerce, Gender, and the Family in England* U. of Calif., P. 1996
- Wright, L. B. *Middle - Class Culture in Elizabethan England* Cornell U. P., 1958